

令和 06 年 05 月 11 日 拉致問題国民大会

私は超党派で組織される拉致議員連盟会長を務める古屋圭司です。

21 年前に一部の拉致被害者は帰国できたものの、

今年もこのように国民大集会を開催しなければならないこと、即ち家族会が主張する「拉致被害者の全員即時帰国」がまだ実現していないことに対し、誠に残念な思いとともに忸怩たる思いです。

しかし、相手は異常な独裁国家北朝鮮です。

その北朝鮮は、国連・国際社会の警告を全く無視してミサイルや核開発にのめり込み、ロシアとは武器の提供や労働力の派遣など完全に裏では握っているというのが現実です。

プーチン・金正恩会談が堂々で行われていることも怒りを覚えます。北朝鮮の実態は、経済事情も食料事情も悪化の一途をたどっているのが現実で、在外大使館の相次ぐ閉鎖や国内での非人道的な粛清が強行されていることを見ても明らかです。

しかし北朝鮮は、核とミサイルを実用化すれば大国である米国とも対等に立ち回れるとの一心でのめり込んでいるのが現実です。

我々拉致議員連盟と家族会、救う会は連休の間米国ワシントンを訪問し拉致問題に関心を示す有力な上下両院議員、国務省を始めとする政府高官、シンクタンク、専門家等と精力的に会談を重ね、拉致問題解決への共通認識と連携強化をしっかりと共有することができました。

家族会の横田拓也が冒頭にて挨拶にて触れられました。また詳細は後程自民党代表の塚田一郎議員に委ねますが、ポイントは元駐日大使で上院議員を務めるハガティ氏や、新たに日本人拉致問題の国会議決を目指す議員、国務省の事務方トップである国務次官、次官補、次官補代理も全員顔をそろえて意見交換するなど、拉致問題解決への日米連携強化はかつてないほどに強いと、皮膚感覚で感じ取りました。

印象的だったのは、大統領補佐官を務める NSC 上級部長のラップフーパー氏は、「私も 2 人の子供を持つ母親だが、拉致が如何に非人道的かはよく痛いほどよくわかる。米国政府も徹底的に協力したい」と言明しています。

昨日は官邸にて岸田総理に報告をさせていただきました。

この後ご挨拶いただく岸田総理も、「時間的制約のある拉致問題はひと時もゆるがせにできない。金正恩委員長との首脳会会談の実現を目指し、直轄のハイレベル協議を進めていきたい」と言明しています。また今国会においても同様に答弁されています。

我々拉致議員連盟もこの総理の覚悟に全面的に賛同し、背中を押すべくそれぞれの立場で、あらゆる取組みをしていくことをお約束します。

金正恩委員長は、能登半島地震で異例のメッセージを送りました。何かのサインかもしれません。あらゆるチャンネルを駆使しその真意を分析しつつ、金正恩委員長に拉致問題を解決することこそが北朝鮮に明るい未来をもたらすことを解らせることです。

そのために、ぜひ今日全国からお集まりの皆さんには、金正恩が目論む拉致の風化を絶対にさせないため、多くの若い世代の皆さんに「拉致は国家によるテロであり、究極の人権侵害」であり絶対に許さない。との強い覚悟を訴え啓発をお願いします。

拉致議員連盟会長としての挨拶に変えます。